

# 知る時

## サージ・カヒリ・キング

‘ ‘Ike no i ka la o ka ‘ike, mana no ika la o ka mana. ’ というハワイの諺は通常、「知る時があり、力を用いる時がある。」と訳されます。これは、適切な時に適切な事を行うという意味です。知識を集める時には知識を集め、力を用いる時には力を用いるのです。人生のリズムに従う時、人生は私たちにとってより良く作用します。

25年前ほど私は、地域開発サファリの一つに出かけて、モーリタニアのサハラ砂漠に居ました。私は一日中、井戸の視察、栄養プログラムの評価、そして内陸のベルベル族の一つで実施されていた農業計画のコンサルタントに従事しました。その一日の終わりはとても暑く、すぐに脱水症状になるのを防ぐため、私はバンダナを口に巻いていなくてはなりませんでした。長（おさ）と彼の家族と共にお茶を頂きながら、黒い山羊皮のテントの中で、美しく織られた敷物の上に座っていました。テントの端はめくられていたので、遠くの砂丘で太陽が燃え上がるのを眺めながら、涼風を堪能していました。外のキャンプファイアーの周りにはターバンを被り、バーヌースを羽織った男たちが集まっていました。彼らの優しい言葉が地べたで休んでいるラクダの鳴き声やのどを鳴らす音と、遠くに離れて座っているベールを被った女性たちのほとんど聞こえない話し声と混ざっていました。全てがとてもエキゾチックで美しかったです。若い男性が銀と黒檀で複雑に彫刻されたティーポットから私にお茶をさらに注いでくれる時、私は思いました。「友よ！またやりましたね！」今なら私は「あそこへ行って、あれをして、欲しい物を手に入れた！」と言ったでしょう。

この出来事は、ティンブクツ(Timbuctu)からフェルナンド・ポオ(Fernando Poo)まで、ダカールからナイロビまで、そしてその間に無数にある地点を通して旅をした、西アフリカでの冒険に満ちた7年間の最後に起こりました。限られた中では、私が見聞きしたことは書き切れませんが、私は、ターザンとジャングルジムの空想世界よりも激烈に生きていた、と言うだけで十分でしょう。私は業界では最高の一人として、国際的に認められつつありました。開発業務に新しいアプローチを展開させ、何百万もの人々の生活が向上するのを手助けし、そして頭のとっぺんからつま先まで退屈していました。私は知識がとても豊かで、技術が非常に高かったのですが、窒息しそうでした。私の中の奥底で、成長するの必要を感じていました。あの状況で、あの時期には、私には内的な成長をする余裕がありませんでした。ですから私は辞職したのです。

無職で、乏しい金しか持たず、私は家族を伴って別の冒険を始めました。それが結果的には、上記の冒険と奇妙に似ている、現在の状況へと導いたのです。今日私は国際的に名が知られた演説者で、世界中でワークショップやセミナーを催しています。私は教えるのが好きで、上手に教えます。しかし奥底から再びあの声が聞こえます。「成長する時です。知識を集め私の力を別な方向に用いる時です。」勿論、全く違ってしまふので

はありません。アフリカで私は、人々の自助を援助しましたが、今もそうしています。これはし続けます。しかし、違った方法で行う時期なのです。

何年間も自分が今まで書いた以上にもっと書きたいと思ってきました。私は、そうするつもりです。教え楽しませるゲームを開発するのを楽しんできましたが、公表する機会がありませんでした。私は今、それをするつもりです。今日インターネットが私たちに創造し、交流する広範な機会を与えていて、私を本当にわくわくさせます。私はそこに頭から真っ逆さまに飛び込もうと思います。

私の誇りである、ワークショップを教えることに対する私の突出した献身は、アロハ・インターナショナルのスケジュールで見ることが出来ます。日曜日のフナトークと時折の講義または3時間セミナーは続けますが、私の最後のワークショップはこの5月に、ヨーロッパで開催されるでしょう。幸いなことに、アロハ・インターナショナルには、世界中に多くの有能な教師がいて、最も良い教師の一人である、スーザン・パイニウ・フロイド(Susan Pa'iniu Floyd)がカウアイ島での訓練の責任者になるでしょう。

これで勿論お別れではありません。他のカヌーから大声で威勢よく「アロハ！」と声をかける事なのです。人生は変化だけではなく、成長でもあります。

「学び読み解かなくてはならない多くの謎があります。

私が磨き、応用したい技術があります。

不思議と冒険に満ちた世界が私を待っています。」と、

私の霊が語ります。

成長しなければなりません、さもなければ死んでしまうのです。

翻訳 M. Hayashi (2005)

Copyright by Aloha International 1997